

特集

アジアの大学を知る 日本の看護研究力を高める

日本の看護学は世界で類をみないほど、そのクオリティは高いと確信している。この素晴らしい看護学をどのように世界に発信するか。看護研究がその一助になることは間違いない。

2017年4月、東京大学大学院医学系研究科附属グローバルナースングリサーチセンターが開設され、1年半が経過した。少子・超高齢社会を迎え、「治す医療」から「支える医療」への大転換が求められている中、ケアの中核を担う看護学に大きな期待がかけられている。その背景のもと、当センターは、異分野融合型イノベティブ看護学の遂行と海外への発信、それを先導できる若手研究者の育成をミッションとして設立された。2017年度の1年間で3名の外国人教授・研究員を招聘し、当センターのプログラムを受けた2名の若手研究者を輩出した。また、他大学の若手研究者の指導とともに、目標数を超える56編の英語論文を世界に発信し、センターの基盤は徐々に整備されてきた。次の目標は、国際的競争に打ち勝つ、より質の高い看護学研究を行なうことである。

世界の大学ランキングの1つに、英国の大学評価機関「クアクアレリ・シモンズ社(Quacquarelli Symonds ; QS)」が公表しているQSランキングがある。数年前より分野別ランキングに「Nursing」が設けられ、日本の看護系大学も、QSランキングを用いて世界的な水準で評価されるようになった。残念ながら、日本の看護系大学では東京大学が50～100位(具体的に順位はつかない)にランキングされているのがトップで、50位以内の大学はなく、国際的競争力の強化はこれからの大きな課題といえる。Nursingでは、「Academic Reputation」「Employer Reputation」「H-index Citations」「Citations per Paper」の4つの視点で評価される。すなわち、日本の看護系大学が国際的競争力をもつには、これらの4つの視点を軸に、教育はもとより、より質の高い研究を行なう必要があるといえる。

今回、2017年のランキングにおいてアジア圏内で50位以内に入っていたNational University of Singapore, National Taiwan University, The Chinese University of Hong Kong, The Hong Kong Polytechnic Universityの4校を訪問し、質の高い研究を行なうシステムや若手研究者の育成について視察を行なった。本特集を通して、アジア圏内で世界に認められるトップ大学における取り組みを学び、日本の看護系大学から発信されるわが国の質の高い看護研究が、アジアをはじめ少子・超高齢社会に直面する国々の看護学に貢献できれば幸いである。

企画：真田弘美(東京大学大学院医学系研究科附属グローバルナースングリサーチセンター
センター長/教授, 同健康科学・看護学専攻老年看護学/創傷看護学分野教授)